

近世における「ふるさと」考

リンジー・モリソン

はじめに

「天国はいらない、ふるさとが欲しい」。三〇歳の若さで永眠したロシアの詩人セルゲイ・エセーニンが残した詩の一部である。この言葉が日本でも受け入れられたのは、「天国」にもまさる日本人の「ふるさと」への愛着心が関係していると思われる。東北大地震後、日本人は改めて「ふるさと」の重要性を問い直すことを余儀なくされた。被災地の復興の緊急性を地元愛に訴えるために、エセーニンのこの言葉が度々引用されている¹⁾。「天国」を約束してくれた原発や電力会社に裏切られ、やはり生活を真に充実させるのは目の前にある具体的な「ふるさと」のみである、と。このように「ふるさと」の重要性と必要性を再認識している現在であるからこそ、「ふるさと」をめぐる議論は深められなければならないのである。

明治以降の日本において、「ふるさと」をめぐる文学や映画の作品が次々と作り出され、「ふるさと」を想う心が「日本的な」心情といわれるほどになった。明治以降の地方の過疎化や故郷喪失者の急増により、日本人の「ふるさと意識」は急速に高まったと言われているが、それ以前の「ふるさと意識」は如何なるものだったのだろうか。これほど日本文化にしっかり根付いている「ふるさと」であるため、近代以前にも何かしらの形で存在していたに違いない。

ところが、これまでの「ふるさと」研究において、様々な研究者が様々な角度から近代以降の「ふるさと意識」について論じてきているにもかかわらず、近代以前の「ふるさと意識」に関する研究はないに等しい。たとえば、成田龍一の『「故郷」という物語』（1998年）と『故郷の喪失と再生』（2000年）、ジェニファー・ロバートソンの *Furusato Japan: The Culture and Politics of Nostalgia* (1988)、藤井淑禎の『景観のふるさと史』（2003年）などはあるが、どれも明治以降の分析にとどまる。

現代日本人にとっての「ふるさと」とは、漠然とした田園風景というイメージがほとんどである。「ふるさと」といえば、おじいちゃんとおばあちゃんが住む、美しい緑に囲まれた田舎の古民家やその周りの自然を思い浮かべる人が多いだろう。このようなイメージは、高野辰之²⁾ 作詞の唱歌『故郷』の歌詞内容に由来するところが少なからずあり、「山は青き、水は清き」という抽象的なイメージは現代日本人の「ふるさと意識」の象徴になっていると言えよう。

では、近代以前における日本人の「ふるさと意識」もこのようなぼんやりとした田園風景

であったのだろうか。様々な研究者が主張するように、田舎に憧れて懐かしむ心は現代日本人特有の心情なのだろうか。本研究の目的は、近代から一步さかのぼり、近世における「ふるさと意識」を考察することである。参勤交代制度や旅文化の発達によって移動がより自由となり、各藩への帰属意識が強まる近世の中で、江戸へ赴いた者は遠い「ふるさと」を懐かしく思っていたに違いないが、そういった人々はどのような「ふるさと」イメージを抱いていたのだろうか。本稿は、近世の歴史や文学に関する資料を参照しながら、江戸時代に生きた人々の「ふるさと意識」はどのようなものであったかを確認し、日本人の「ふるさと意識」の歴史的な系譜をたどることにする。

1. 「ふるさと」の変わりゆく定義

(a) 変容する「ふるさと」の定義

最初に、近代以前の「ふるさと」の実態を把握するために、国語辞典に載っている「ふるさと」の項を見ておきたい。『広辞苑』では、以下の定義となっている。

- ① 古くなって荒れはてた土地。昔、都などのあった土地。古跡。旧都。
- ② 自分が生まれた土地。郷里。こきょう。
- ③ かつて住んだことのある土地。また、なじみ深い土地。

①をみると、かつて「ふるさと」は「旧都」の別称として使われていたことが分かる。現代日本人が最も慣れ親しんでいる用法は、②だといえる。そして③は、やや限られているが、現在でも使う場面は想像できる。上田秋成の万葉集註釈『金砂』にも、「ふるさととは旧都を云ふ、転じて吾本土をも云ひ、また旅に在りては産国をいひ、かつ名だかくふりたる処をも云ふ」と書かれている³⁾。ここでも「旧都」の意味が最初に述べられており、現代語の「ふるさと」の意味に近い「本土」や「産国」はその次にある。

この「旧都」としての意味は遷都の歴史と密接な関係にある。7世紀末の藤原京以前は、「歴代遷宮」という、天皇の代が替わると同時に宮殿が移転される行事が行われていた。歴代遷宮の理由に関しては、本居宣長がとなえた父子別居制の説や、久米邦武による死の穢れを避けるために即位の際に新しい土地を占って宮としたなどの諸論がある。理由はともかく、藤原京の頃から「都は永久的な都造営の方向に向い」⁴⁾、「中国風の都市計画に基づく、政治経済のセンター」として造られ、以後は代替わりの遷都が不要となった⁵⁾。遷都の行事がなくなると、「旧都」の意味での「ふるさと」は使われなくなり、「本土」や「産国」の意味だけが残ったのだろう。

(b) 「都」と「鄙」の間にある「ふるさと」

「旧都」の意味での「ふるさと」を使っていたのは、主に都に住んでいた貴族たちであっ

た。これについて、古代文学者の永藤靖がこう述べている。「平安貴族にとって、鄙の『ふるさと』は荒れはてた古都であると同時に、故郷である。自分たちがそこに不在であることで、古里であり、故郷である。新しい都に、文化や政治のあらゆる中心が移った時、貴族たちにとって旧都は鄙となり、古里となる。そういう対立意識がここにはある」⁶⁾。したがって、「ふるさと」は「鄙」であるとともに、「都」と「鄙」をつなぐ存在でもあった。

「都」は皇居のある土地を意味し、「鄙」は「都」に対する遠隔地として考えられていた。それゆえに、「都」と「鄙」は不可分な関係にあり、「ミヤコもミヤコの『辺』も、広大なイナカの存在を前提としてはじめて意味をもつ」のである⁷⁾。社会学者の園田英弘によると、「ミヤコ」は3つの性格をもっている。それは、王宮性と首都性と都会性である。つまり、ある場所を「ミヤコ」と呼ぶには、王宮がそこに存在し、政治の中心であり、経済的に栄えて文化的に優越していなければいけないということである。さて、「都」に対する「鄙」をどう定義するのか。園田によれば、「イナカとは本来は具体的な場所を意味しているのではなく、イナカ以外のものとの関係で初めて意味をなす関係概念だという点である。それは具体的には、否定形によって定義される言葉である」と述べている⁸⁾。また、「イナカのいちばん対極にあるのはミヤコということになり、イナカとは『ミヤコ以外の場所』という一辺の定義を与えることができるであろう」という⁹⁾。要するに、古代ではこのような「都」と「鄙」（又は「周縁」）という対立的な二元構造が存在していたということになる。

「都」に住む人々にとって、「鄙」はどういう存在であったか。永藤が述べるように、貴族たちは「一步都を出れば、歌枕以外のあらゆる自然の相貌が旅人の前に広がっている。それにもかかわらず『名づけられて』いない土地には目を向けることもなく、またその土地に安心することもできなかった」¹⁰⁾。言い換えれば、名所や歌枕を通してしか「鄙」は特徴をもたず、都人の目には、「鄙」は未開の地であり、野蛮の地として映っていた。現代人が想像する「兎追いしかの山」的な田園風景の「ふるさと」とは程遠いイメージなのである。平安時代の貴族たちにとって、「鄙」は慣れ親しむ場所ではなく、恐ろしい未知の世界であった。むしろ、「都」や雅の文化が現代語でいう貴族たちの「心のふるさと」であった。

「ふるさと」は「鄙」の一部として考えられていたものの、「都」の残像であったため、歴史的で文化的な意義をもっていた。純粋な「鄙」と異なり、「ふるさと」は未開の地ではなかった。そのため、「ふるさと」は「都」でも「鄙」でもない、中間的な存在であったと考えられる。このように、「ふるさと」の言葉の中には、自然を代表する「鄙」の中から「都」が現れ、遷都の時にまた「鄙」に帰るという、自然の回帰性が潜んでいる。

(c) 変容する「ふるさと」

このように、かつて「ふるさと」は現代語の「ふるさと」と異なる意味で使われていた。古代では、主に「旧都」という意味で使われ、自然状態に近い、寂れてしまった様子を表現する言葉であった。都が固定してから、「旧都」の意味での「ふるさと」は観念だけになり、

やがてはその観念も通用しなくなった。その代わり、「ふるさと」は現代語に近い「本土」や「産国」という意味だけで使われるようになる。

さて、貴族の世界から武士や町民の文化が栄える近世になって、「ふるさと意識」はどのように変化しただろうか。幕藩体制により、「都」意外の「周縁」の経済が繁栄し、各地域の特性が意識されるようになるため、日本の中央以外の土地は茫漠たる「周縁」から具体的な「国」に変化していく。その変化が「ふるさと意識」にどのような影響を与えたかを次に考察する。

2. 近世の「ふるさと意識」の形成

(a) 徳川幕府の政策

慶長5(1600)年9月に関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利し、3年後に征夷大將軍に就くと、直ちに領国だった江戸で幕府を開いた。そして、徳川家が行き組んだ様々な政策やインフラの改善は、近世における「ふるさと意識」の形成に大きな影響を与える結果になったと考えられる。

まず、江戸は政権の中心地となったものの、三都（江戸・京都・大坂）の繁栄と幕藩体制により、政治の力がより均等に全国に及ぶようになった。三都の構造によって、首都の機能が各都市に分けられたためである。京都には貴族や職人の文化があり、着物などの生産が盛んであった。大坂では商人が有力だったため、当然商業が栄えていた。江戸は武士の密度が最も高く、政治と消費の中心地であった。それまでは、京都が文明の頂点である「都」で、それ以外の地域は茫漠とした「周縁」と考えられていたが、三都の繁栄によりこの二元構造がなくなり、各都市の個性が明確化した。なおかつ、幕藩体制が確立されたことにより、全国の国々が経済的に栄え、それぞれの文化が発展していった。結果的に、三都以外の藩までもが固有の特徴をもつようになり、互いにその個性が認められるようになる。

三都を繋げ、江戸と各藩との間をより往復しやすくするために、徳川幕府は交通機関を改善する努力をした。国々を統一させる権力者がいなかった室町・戦国時代では、街道は維持されず、多くが廃道となってしまった。中世の間、日本はいくつかの独立した、敵対関係にある領地に分けられ、各地の間の交渉を制限するために、断片的な交通網しか存在しなかった。中世後期になると、各地の戦国大名の領内における交通機関は、次第に改善されるようになった。初めて交通機関の重大さに気付いたのは、織田信長だろうとトラガノウは述べている¹¹⁾。信長は自分の支配地域では、交通路を整備し、関所を廃止した。この関所撤廃政策は豊臣秀吉が後に受け継ぎ、さらに国内の交通整備を進めた。その後、徳川幕府が政権を握ると、かつてないほどに街道を再整備し、維持に努めた。五街道に宿駅制度を施行し、大河には渡船を置き、渡守に扶持を与え、全国の街道に一里塚を設置した。

幕府が街道を改善した目的の一つは、参勤交代のためであった。参勤交代制度により、隔年で、大名とその家臣たちは、江戸と国許とを結ぶ街道を整然とした行列で往復しなければ

ならなかったのである。さらに、大名の将軍に対する服従を保証するために、大名は妻子を江戸の藩邸に住ませよう命じられ、大名の妻子は「事実上の人質」であった¹²⁾。大名と家臣は常に江戸と国許の間を往来していたため、経済的かつ文化的交流が自ずと中央と地方の間、そして道中に行われていた。

街道の改善により、武士の他に商人や農民による移動がより自由になり、旅文化も発達していった。しかし、幕府は庶民の移動を望んでいなかったため、女性と農民を中心に、仕事以外の旅を厳しく制限した。前者に関しては、大名の妻が江戸から逃亡して国許に帰る恐れがあったためであり、後者については、幕府が農民を社会の経済的で道徳的な柱として捉えていたからである。農民が移動すると農作物の生産が低下するため、農民は無許可で居住地を離れることは許されなかった。それにも拘らず、旅文化は次第に発達していき、多くの人々は社寺参詣や名所見物を楽しむために、遠方の土地へと出掛けた。

前述したように、古代では地方に対する認識が低かった。貴族たちの目には、「鄙」は野蛮の地、未開の地として映っており、歌枕を通してしか歴史的かつ文化的な価値を持たなかった。しかし、三都の繁栄と幕藩体制の確立によって、幕府の権力が全国に行き渡るようになり、地方の国々は経済的に栄え、発展した。各国の特徴が明確化したことを示す書物として、『人国記』がある。

『人国記』は、全国の地理・風俗・人情などといった特徴を国別に書き記した書物である。その出版年（文亀2(1502)年－天正元(1573)年頃と思われる）から察すれば、室町・戦国時代の時点では、各国に対する意識が既に芽生えていたということが分かる。例えば、「陸奥国」の項には、「陸奥の国の風俗は、日本の偏鄙なる故に、人の気の行きつまりて、氣質の偏りその尖なること、万丈の岩壁を見るが如くにして、邂逅に道理を知るといへども、改めて非を知ると云ふ事なし。たとへ知るといへども、改めて非を為さざること少なく、譬えば江の水の流れなくて、塵芥じんがいの積りて清むることなきが如し」と、陸奥の国の人々に対する極めて痛烈な文章が添えられている¹³⁾。また、「この国の人日は日の本の故にや、色白くして眼の色青きこと多し」というように、外見の特徴についても言及されている¹⁴⁾。

近世になると、交通機関が改善され、幕府の権力がより均等に全国に行き渡り、参勤交代が義務化された。その中で、異国の存在を認識するようになり、接する機会も増えた。そして異国と対比することによって自国を見る目を培った。「ふるさと意識」とは、比較対象となる異郷の地に行ってから得られるものであるため、この時代における国々の密接な交流は「ふるさと意識」をいっそう高めたと言えるだろう。『人国記』が再び元禄14(1701)年に編纂されたということは、自国と異国に対する関心が高まっていた証であると考えられる。

(b) 参勤交代の役割

参勤交代は、幕藩体制の基盤であり、徳川幕府による大名支配政策の一つであった。寛永3(1626)年に発令されてから、文久2(1862)年までの間、ほとんど変化せずに行われ続けて

いた大名行列は「近世日本の象徴」となっていた¹⁵⁾。参勤交代の「参勤」は領国をもつ大名や旗本が江戸へ出府するということで、「交代」は国許へ帰ることを指すのである。そこで、江戸へ赴くことを参府、国許へ帰ることを暇と呼んでいた。国許から江戸への往来を義務化することにより、「大名の戦争準備能力を弱体化させただけでなく、経済発展、都市化、そして社会生活の変容といった、別の大きな変化を生み出す原動力となった」¹⁶⁾。鎖国政策により、外国との貿易が厳しく規制されていたため、参勤交代は国内の経済発展を促す大事な役割を果たしていた。その性質上、参勤交代は「ふるさと意識」の高まりと具体化に大きな影響を残した要因の一つとなった。

江戸と国許を往来した大名とその家臣の消費習慣、物品の使用、そして文化的活動は、全国に及ぶ文化を運ぶ役割を担い、地方の発展に寄与した。その上に、幕府が公式行事として大名に進物を献上させていたことが、各地域の物質文化を全国に浸透させる働きにつながった。こうした物質文化の浸透により、「名物」を通して地方の個性が強まり、中央と地方は互いの認識を深めたと考えられる。

今日の東京のように、近世江戸はさまざまな文化が入り混じり、流通する中心地として重要な役割を果たしていた。さらに、江戸は芸術家や学者が最新の知識に接し、一人前になるための訓練が受けられる場所であった。そして、彼らがその知識を自藩に持ち帰り、地元の人々に伝授することによって、江戸文化が段々全国に普及していった。

日本史学者コンスタンチン・ヴァポリスは、「道中に経験した辛さは、藩外の状況を観察したり、異郷の人々と会話をしたりすることである程度緩和されたに違いない」と述べている¹⁷⁾。一例として、ヴァポリスは八代藩（現：熊本県）の藩主静山のエピソードを挙げている。静山は「休憩したり宿泊したりしたすべての宿駅において、宿の主人や現地の人々に、周辺で何か変わったことはないかと尋ねることを常としていた。これには単なる自然の風景だけでなく、民俗、方言、地名譚なども含んでいる」¹⁸⁾。このように、江戸滞在のみならず、江戸への道中も文化交流の機会に満ちていたのである。この異郷に対する旺盛な好奇心は、国と国の間にそれだけ膨大な文化的差異があったことを暗示しているが、自藩と他藩を比較することによってこそ、「ふるさと意識」も異郷意識も同時に高まるのである。

実際、大名の自国に対する意識は実に強いもので、「ふるさと」に対しては常に愛着心と自慢の心をもっていた。長い江戸への旅のお供として、多くの大名は「ふるさと」の物品を携帯していった。中には「膳や食器、茶箱や菓子箱、鍋島家の茄子漬のような地元の珍味などの品々」を持って行った大名もいる¹⁹⁾。極端な例として、加賀藩前田家は風呂の湯まで金沢から運ばれたと伝えられている。これほど「ふるさと意識」が高く、「ふるさと」に誇りをもっていた藩士たちは、長い江戸滞在の間、遠くから「ふるさと」を偲ぶことが度々あったに違いない。「気の置けない友人、信頼出来る同僚、かけがえのない家族と別れて生活していることによって、不安感が醸成されたのであろう」し、ある程度の「カルチャー・ショック」もあったのだろう²⁰⁾。江戸は18世紀初頭の時点で人口が既に100万人を越えていた

大都会であったため、大都会らしく、騒々しくて混雑していた。そう考えると、江戸後期の儒学者・漢詩人の菅茶山が自分の詩句で江戸を「争奪の場」「囂塵」と称しているのはうなずける²¹⁾。彼は「意に反して福山藩に召し抱えられてしまい、江戸への出向をも余儀なくされた」が、何よりも茶山は「自らが生まれ育った土地から遠く離れることを厭う気持ちを有していた」といわれている²²⁾。ここにも、「ふるさと」に対する強い愛着心が見られるのである。

ヴァポリスは、江戸に滞在する者の国許とのやりとりについて、「藩士の日記の多くには、使者に対する関心の高さが反映されており、使者の日程、到着予定日、到着日時、出発日が、驚くほど頻繁に記録されている。また、使者の出発予定日が近づくと、藩士たちは大急ぎで手紙を書き上げた。なぜなら、次の使者の到着まで十日近く待つ必要があったからである」と書いている²³⁾。手紙のやりとりを通して、藩士たちは「ふるさと」に残してきた人々とコミュニケーションを取り、離れて生活することの寂しさを紛らわすことができたのである。その使者に対する並々な関心の高さも、望郷心の強さを物語っている。次に、望郷の念に駆られた藩士たちが、どのように故郷を想っていたかを具体的に検討する。

(c) 久留米藩江戸勤番長屋絵巻

「久留米藩江戸勤番長屋絵巻」（以下、「久留米絵巻」と略す）は、筑後国久留米藩主の参勤交代に随行して、江戸に滞在した藩士たちの日常を描いた作品である。ヴァポリスによると、「明治初期に制作されたであろうこの絵巻は、天保十一年から翌十二年にかけて起こったと考えられる出来事を描き出している。それゆえ、この絵巻は狩野と戸田の二人による回想を中心に展開しており、故郷と家族から離れて江戸に滞在せざるを得なかった頃を懐古する内容に仕上がっている」²⁴⁾。藩士たちの江戸藩邸内における長屋での日常風景を描くことによって、日常の気晴らしとなったであろう。戸田熊次郎が書いた序文では、絵巻を作成した理由として、「古郷人にもしめしかつはやつかれの昔語りの一助ともなしてむと物しはへる」と記している²⁵⁾。つまり、この絵巻を「ふるさと」の人に見せることによって、いずれは「昔語り」の助けとなるだろうという趣旨である。さらに、「四季折々に庭をととのえ、茶の湯や将棋や俳諧に暇を過ごし、ときには赤羽橋周辺の賑わいに心をよせる気楽さを述べ、そのような暮らしとささやかな感興を絵に」したと書かれているように、藩士たちは江戸にいる間、妻子のしがらみから離れて「ささやかな感興」に没頭できた²⁶⁾。

藩主と一緒に江戸へ向かった藩士の大多数は、家族を同伴せずに江戸に滞在していたため、ある程度は個人の自由な時間を楽しむことができた。しかし、その代わり、家族を同伴した長期赴任の藩士の妻子以外の女性は、居住区域に入ることが許されなかった。そのため、藩士は女性と接する機会が限られていた。絵八（図1）では、明障子の窓から庭を見下ろす場面が描かれている。眺めているのは庭にいる2人の女性であるが、家族から離れて暮らさなければならない藩士には、望郷の念を掻き立てる光景だった。長期赴任する藩士の

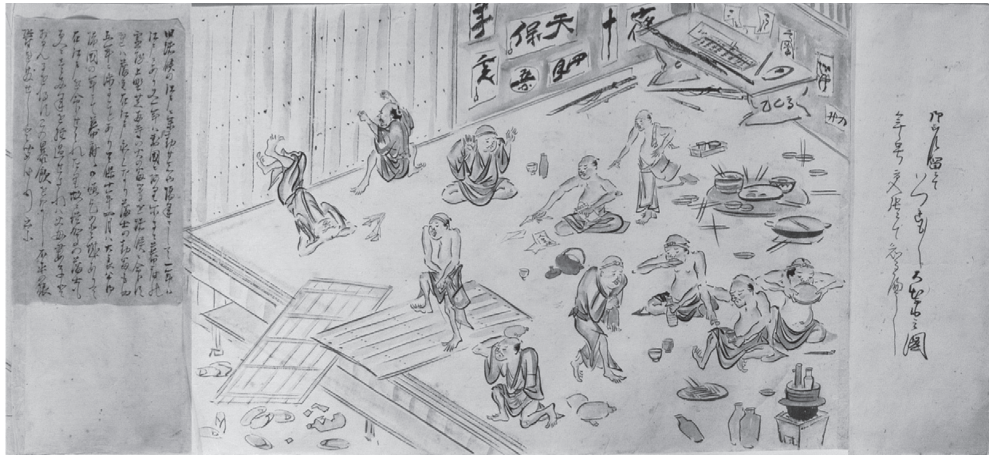


図3 絵一一・詞五・付箋一〇
(小林法子「大川市立清力美術館の江戸勤番之図」1284頁)

敷の荒壁にハ凌雲殿の画書る大船東風に真帆かけて万里の波濤を凌ぎ わか古郷へ帰る勢ひあるは是も帰るのゑんきならんかとおもふうちに三とせの秋もちかく成ぬ 嗚呼日の永き事」とある²⁷⁾。ここでは、帆掛け船には帰郷の思いが託されており、久留米藩士たちに「ふるさと」から遠く離れていることを思い出させるものであったことがうかがえる。なぜなら、江戸から国許へ向かう旅路の最後で、大坂からその絵に描かれているような船に乗らなければならなかったためである。江戸滞在はささやかな感興がありながらも、江戸に来てから3年も経過してしまうと、やはり望郷の念が強くなり、「ふるさと」に帰りたくなるのは山々であった。

ようやく帰国の時期が訪れたものの、久留米藩は居残りを命じられ、江戸滞在がさらに2年延長されることになった。ヴァポリスによると、「参勤交代で江戸に在府している大名は、所定の在府期間後には正式な手続きに則り、自藩へ戻る許可を幕府へ申請する必要があった」が、久留米藩主の有馬頼徳が江戸城へ登城すると、「申請は却下され、彼は江戸に留まって継続して在府することが求められた」²⁸⁾。居残りの理由は、前年の冬に焼失した江戸城西ノ丸普請の手伝いであった。それを聞いて、帰国をひたすらに待ち望んでいた藩士たちは落胆した。その失望の様子は絵一一（図3）に描かれている。彼らは鬱憤を晴らすために、暴飲に走って泥酔し、とっくりを粉々に打ち碎き、長屋の引き戸を破壊した。このやけ酒の修羅場は、『久留米絵巻』最大の山場である²⁹⁾。絵巻の文章には、「この暴飲をなし不平の旅鬱を散ぜしと聞云ふ」と書かれているが、「ふるさと」に対する強い愛着心・郷愁が誘引した結果といっても差し支えないだろう³⁰⁾。

このように、参勤交代は近世における「ふるさと意識」の形成を大きく促進していたことが分かる。物質文化の浸透や道中の異文化体験により、藩士たちは「ふるさと意識」と異郷意識を同時に高め、さらに「久留米絵巻」が示すように、藩士たちの旅愁は非常に強かった

上に、その「ふるさと意識」は具体性をも帯びていた。それは、絵に描かれた帆掛け船、庭の二人の女性の姿、家族からの手紙といった具体的な物を通して望郷の念を募らせたように、古代の貴族や現代日本人が抱いている抽象的で観念的な「ふるさと」と比べて、より具体的な「ふるさと意識」だったと言えるだろう。

次に、江戸の旅文化の発達と「ふるさと」の「発見」について考察する。

3. 近世の旅文化と「ふるさと」の「発見」

(a) 旅文化の発達

参勤交代によって武士の移動は義務化されたが、同時に全国各地の農民や町人も初めて遠方の土地へ社寺参詣や名所見物の旅に安心して出掛けられた時代でもあった。幕府は街道の改善を国の統治、支配の手段として考えていたが、結果として庶民の移動をより自由にし、旅文化の発達を促進する要因となった。これは、徳川幕府の意図ではなく、むしろ、幕府の意に反する副作用であった。儒学者・思想家の荻生徂徠も移動を問題視し、農民だけでなく、武士も故郷にいるべし、と「武士土着論」で説いた。徂徠は移動全般、特に参勤交代を道德の崩壊を促すものと見なし、江戸を退廃的な遊び場として考えていた。『政談』の中では、「今の世の人、百姓より外は武士も商人も故郷といふ物をもたず。雲の根をはなれたる境界、哀の次第也」と徂徠は書いている³¹⁾。権力者の反対にもかかわらず、街道の改善と、江戸の急速な都市化とそれに伴う雇用の拡大によって、人々の移動率が増加していった。さて、この移動の自由は「ふるさと意識」にどのような影響を与えたか。

従来、「ふるさと」と「旅」は不可分な関係であった。昔の感覚では、「ふるさと」は文字通り人が後にした場所であり、現在住んでいる場所ではない。しかし、一生の内に転居を度々繰り返す現代人と違って、昔の日本人は住んでいる場所から離れることはほとんどなかった。「ふるさと」を出ることがあるとすれば、それはたいてい旅のためであった。しかし、旅とは永遠に続けるべきものではなく、あくまでも一時的なものであり、いずれ「ふるさと」に帰ることが旅の前提であった。つまり、「ふるさと」を後にして旅立ち、旅路から「ふるさと」を偲び、そしてまた「ふるさと」に帰るといふ、円環的永劫回帰の構造である。旅先は目的地である一方、「ふるさと」は同時に出発点であり、到着地である。このように、旅は「ふるさと」を「発見」する機会を与えたのである。

近世において、庶民は初めて安全な旅ができたとはいえ、すべての街道において快適な旅ができたというわけではない。「日本の国土は山地が多く、このため海岸近くまで山が迫っている所や、急流の河川が海に注ぐ地域、また急峻な峠もあった」ため、長旅はとりわけ危険なものであった³²⁾。したがって、当時は「送り迎えの人情は濃やかであり、旅情も望郷の念も切実なのであった」³³⁾。「旅は憂いもの辛いもの」という古い言い回しが意味するように、旅というものはとにかく苦勞に満ちた、寂しくて辛いものであった。精神的・体力的な苦勞を背負わされる旅人の目には、馴染み深い父母の地である「ふるさと」はなんと美し

く、明らかに見えただろう。

ところが、武士や町人と比べ、農民にとっての旅は一味違うものであった。永藤靖は和辻哲郎の有名な『風土』の分析を借りて、「遊牧民族」と「農耕民族」の世界観や生活様式の違いを説明している。永藤によれば、農耕民族は土地に定着することによってはじめて生活が成立するという。なぜならば、遊牧民族の生活は牧草を求める旅であるのに対し、農耕は一定の土地に定着しなければ、彼らの生活の基盤である種蒔きと作物の収穫ができないからである。農耕生活者と旅について、永藤靖は以下のように述べている。

農耕生活者にとって旅とは日常ではなく、異常な状況であり、事件であった。そしてもしも旅をすることを余儀なくされることがあったにしても、当時の交通事情からいえば、それは常に死と隣りあった困難と危険とを伴っていた。故郷という生活の基盤、土地という生命の場を離れることは、死に瀕する世界に足を踏み入れることであった。

農耕生活者には、旅はまずこのような故郷という安定した空間が前提にあって成り立ち、かならず出発した土地にもどってくるという仮定を含んでいるのである³⁴⁾。

農耕生活者にとっては、「ふるさと」以外の地は恐るべき「他界」であった。もし村を出ることがあれば、それは死と隣合わせになることを意味していた。さらに、江戸時代には「異境に旅をして帰国・帰郷できずに亡くなる人が、恨みを残し幽霊になるという考え方」があったため、「近世の旅は幽霊や妖怪との結び付き」が強かった³⁵⁾。このような危険性を帯びた世界に比べれば、「ふるさと」はまさに桃源郷のように思えただろう。旅路で「ふるさと」を懐かしんでやまない心情は、こうした不安と恐怖の感情に対処するための精神的メカニズムだったのであろう。旅人の唯一の心の支えは、いずれ「ふるさと」の地に帰るという願望のみであった。

近代になってからも、都会で立身出世し、「ふるさと」に帰るという円環的な考え方は続いた。有名な唱歌『故郷』(大正3(1914)年)の「志を果たして、いつの日にか帰らん 山は青き故郷、水は清き故郷」という歌詞で分かるように、すべてのこころざしを果たしてから、「ふるさと」に帰るのが一般的な「ライフ・コース」だと考えられていた。古くから使われている「故郷に錦を飾る」ということわざも、いずれ「ふるさと」に帰ることを前提としている。永藤によれば、この円環的な永劫回帰の「ふるさと意識」は「種から実りへ、実りの種から再び次の実りへ」という循環のかたちによって緩慢な連続をなしてゆく農耕民族の発想によるところが多い」という³⁶⁾。このような考え方の普及には、近世における農民の移動がより自由になったことが要因の一つとなっているのかもしれない。近世において、交通機関が整備され、安全な旅ができるようになってから、より多くの農民が移動し、「ふるさと」を「発見」できた。この「発見」された「ふるさと」は、貴族のひなびた旧都と異なり、慣れ親しんだ、自然豊かなところであった。こうして農民の「ふるさと意識」は近代の

「ふるさと意識」の基盤になったと考えられる。

以上、近世において旅文化が栄え、庶民が安心して旅に出掛けられるようになったことが、「ふるさと」の「発見」と「ふるさと意識」の変容を導いたことを考察してきた。農民の「ふるさと意識」は現代の「ふるさと」イメージに大きく影響を与えたかもしれないが、近世の代表的な旅人は紛れもなく俳人であった。次に、「ふるさと」を詠んだ有名な俳諧人の例を見ていきたい。

(b) 小林一茶の「ふるさと」

小林一茶は宝暦 13 (1763) 年に信濃国水内郡柏原村（現：長野県上水内郡信濃町柏原）で生まれた。3 歳の時に母が亡くなり、5 年後に継母が家に入るが、一茶はその継母に馴染めず、2 人の間には不和となる。義弟の仙六が生まれ、一茶を可愛がった祖母が亡くなると、一茶と継母の関係がさらに悪化する。一茶の父は 2 人の不仲をみて息子を家におけないと判断し、15 歳の春に一茶を江戸奉公へ出した。その後、一茶は 15 年もの間、「ふるさと」信濃に帰郷しなかった。江戸では貧しい生活に苦しむが、ついに俳諧の宗匠として名をなす。39 歳のときに、「ふるさと」で唯一の理解者である父が病床に伏し、一茶はそのため帰郷の旅に立つ。父の病床で一茶は財産分割の遺言状をもらうが、その遺言状は後に継母との醜い争いの種になってしまう。

漂泊する俳諧人の不安定な生活に疲れたか、一茶は 45 歳になると、父の遺言状を根拠に、継母と財産分与の争いを起こした。一茶はふるさと信濃に安住の地を確保しようとしたのであった。しかし、長年努力して田畑を増やしてきた継母と義弟は放蕩息子のような一茶に財産を譲り渡したくなかっただろうし、継母たちの勤勉な生活を見てきた村人も一茶の勝手な願望を受け入れることができなかった。そのため、一茶は帰郷の度に、村人から冷遇されていた。一茶は結局、財産の分割を勝ち取って 50 歳のときに「ふるさと」に安住するが、村人や義理の家族はその見苦しい争いをそう簡単には忘れない。一茶はそういった「ふるさと」とのいざこざをいくつかの句に託している。

古郷やよるも障わるも茨の花（「七番日記」文化 7 (1810) 年）

古郷は小意地の悪い時雨かな（「八番日記」文政 4 (1821) 年）

「ふるさと」は茨の花のように、遠くから見れば美しいが、近寄るとそのとげに刺されてしまう。また、「ふるさと」は身体を芯まで冷たく濡らす時雨のようなものであると嘆く。

しかし、「ふるさと」に冷遇されても、一茶は執念深く財産の交渉を続け、「ふるさと」に暮らすことを諦めなかった。次の句は財産の争いのために「ふるさと」へ戻ってそこで詠んだ句であるが、夜は心配事で寝付けなくても、やはり「ふるさと」はいいところだという、一茶の切実な愛郷心が伝わる。

寝にくても生まれ在所の草の花（「連句稿裏書」文化4（1807）年）

前述したように、不安と苦勞に満ちた旅のときこそ、馴染み深い「ふるさと」を偲ぶ心情がはたらくが、一茶の場合もそうであった。次の句は長崎で漂泊していた時期に詠んだものである。

初夢に古郷を見て涙かな（「寛政句帖」寛政6（1794）年）

漂泊は寂しくて孤独なものであり、疲れた旅人の目には「ふるさと」はなんと美しく見えるだろう。一茶の場合、その望郷心が非常に強かったからこそ、それがかえって義理の家族と村人の冷たい視線に耐えるための原動力となったのかもしれない。

このように、小林一茶は若くしてふるさとを追われ、江戸へ向かって俳諧人の道を歩み始め、全国を旅しながら「ふるさと」を偲び、晩年に「ふるさと」の地に帰ったという、前述したような円環的な一生をおくったのである。さらに、一茶の人生には近代以降の理想的なライフ・コースの原型が見られる。つまり、一茶は若くして江戸で「立身出世」し、その大都会で成功をおさめた後、「ふるさと」へ帰り、「故郷に錦を飾った」のである。その理由もあって、一茶は現代人に親しみやすい俳諧人であるのかもしれない。

(c) 江戸っ子の「ふるさと意識」

現代の日本人の感覚からすれば、たとえ東京で生まれても、東京を「ふるさと」と呼ぶのに躊躇する人は少なくないだろう。さまざまな理由が考えられるが、ひとつは、東京に生まれた大多数の人は東京に地縁も血縁も持たないためである。その上に、やはり「ふるさと」といえば「田園風景」を思い浮かべるのであり、東京のような殺風景な大都会はそのイメージからあまりにもかけ離れているのである。しかし、近世の時点では如何であったか。江戸は人の流入が多くて、今日の東京のように騒々しい大都会であったが、江戸に地縁と血縁をもっていた人々は江戸を「ふるさと」とみなしたのだろうか。

最初に、江戸を出身地としないが、江戸を「ふるさと」と呼んだ松尾芭蕉の例を見ておきたい。芭蕉は寛永21（1644）年に伊賀上野（現：三重県伊賀市）に生まれたが、「野ざらし紀行」の中で、江戸を「ふるさと」と呼んでいる。

秋十とせ却而江戸を指す故郷（「野ざらし紀行」貞享元（1684）年）

この句は芭蕉の出身地である関西への旅立ちの際に詠んだ句である。国文学者の池澤一郎によれば、この作品は「伊賀上野を故郷とする芭蕉が異郷としての江戸に久しく住み暮らしているという状況を念頭に置いて味うべき」句だという³⁷⁾。「ふるさと」への旅立ちの際で

あったからこそ、芭蕉はあえて江戸のことを「ふるさと」と呼ぶ。ここで芭蕉の並外れた斬新な感性を感じとれるが、それほど江戸に温かく迎えられ、「ふるさと」のように愛しく思えた証拠でもあると考えられる。

次に、江戸を出身とする人物の例を挙げたい。

大田南畝（寛延2（1749）年－文政6（1823）年）は生粋の江戸っ子であり、江戸文化を誇り高く思っていた。そのため、江戸から離れる度に、激しい郷愁に駆られ、さまざまな景物を通して「ふるさと」江戸を思い出していた。例えば、旅先の新井の宿でウナギを食べた時、「ふるさと」の味を思い出して「吾妻の方の味にくらぶべくもあらず」³⁸⁾と言い放ったり、熊谷駅で薬局の看板に書かれている字を見て「江戸の薬舗に異ならず。[中略] けふはじめて江戸にいれる心地す」と細やかなところにまで江戸の面影を見出していた³⁹⁾。

南畝の紀行文『蘆の若葉』の中には、大坂の旅について書かれている。享和元（1801）年2月27日に到着するが、その後に「両国・永代などいふ所の名をきけば、故郷の事思はずしにもあらず」と言い、既に江戸を懐かしむ心をさらけ出している⁴⁰⁾。翌日にも「江戸屋」という料理屋で刺身を食べた時、「名もなつかしき」と評している⁴¹⁾。同年の6月16日に、難波江で花火を見ながら、南畝は「ふるさと」江戸を思い出し、「ふるさとなる両国の橋のものとけしき、三叉の洲の賑はひし昔まで、そぞろに思ひつづくれば、かぎりなく遠き所にかかるながめする事よと、さすがに心ほそきを」と書く⁴²⁾。夜空に輝いては消える花火を見て、切なさで満ちる南畝の心は、江戸への郷愁と重なっている。ここでいう「三叉の洲」とは、「江戸両国繁華の巷、ころは明和8（1771）年に埋め立てで出来た歓楽地三叉」であるが、後に隅田川に消えたため、ここで南畝は寛政元（1789）年以前へも思いを馳せている⁴³⁾。池澤が指摘するように、「三叉の洲」が消えた頃、南畝は青春の真っ只中であったため、南畝は花火を見て過ぎ去りし青春を眺めていたかのようで、だからこそより懐かしく、切なく感じていたのだろう⁴⁴⁾。

さまざまなものを通して南畝は江戸を懐かしんだが、池澤は、「諸々の景物の中で南畝に江戸との結び付きを尤も強烈に意識させたのが富士山であった」と述べている⁴⁵⁾。南畝の『歳暮旅懐』にある「此舟の中より、遙に富士のねのはじめて見わたさるるもうれしく、はや故郷に帰し心地せらるるは、一年へだてし旅のならひにや」という一節を読めば、富士山が彼の里ごころを呼び起こしたことが明らかである⁴⁶⁾。今日の東京に住む人にとっては想像しがたいかも知れないが、当時は江戸の随所から富士山を常に眺めることができた。そのため、江戸から離れた江戸人が富士山を見て「ふるさと」を連想するのは当然のことであった。

江戸を「ふるさと」と見なした南畝の郷愁において、注目したいことが2つある。一つは、景物を通して「ふるさと」を懐かしむ心である。南畝は富士山やウナギなど、いわゆる江戸の名物を通して望郷の念を募らせた。物を通して「ふるさと」を思い出すといった非常に具体的な「ふるさと意識」である。現代の抽象的かつ比喩的な「ふるさと」とはかなり異なる。要するに、近世において、「ふるさと意識」は具体的なものであり、景物や名物・名

所を通して知るものであったのである。

もう一つ注目したいのは、明治以降と異なり、近世において江戸を「ふるさと」と見なした人がいたことである。この差異について、池澤はこう述べている。

近世の日本では、違和感を感じつつも長く住み暮らす中に、江戸という都市に対してそこはかたない郷愁を抱くようになった人は少なくなかった。それは政治的制度と経済の動向とに左右されての士庶のありかたであったと同時に、近代以前の未発達な衛生環境といった限界をともないつつも、都市と田園との風趣がそれなりに調和を保っていた江戸という都市の構造によって保証されるものでもあった。しかし、地方に於いてすら郷里に根を下ろして父祖伝来の土地を守るといった意識が稀薄になり、東京に対して一片の郷土愛すら有さない官僚によって人間疎外、車中心の社会機構を備え、土地の歴史に関心を向けぬ役人によって江戸伝来の地名が根絶やしにされようとしている今日、狂気に駆られるがごとく東京に集住する者の中に果たしてこのコンクリート・ジャングルに郷愁を感じる人はいるのであろうか⁴⁷⁾。

現代の東京と異なり、江戸は「ふるさと」たる要素をいくつかもっていた。池澤の指摘どおり、江戸は美しい田園都市であった。江戸末期から明治初期にかけて来日した異邦人の記録を分析した渡辺京二の『逝きし世の面影』（2005年）の中では、江戸を見た外国人の多くがその美しい姿について語っている。その人たちの感想について、著者渡辺京二は、「彼らが実見した江戸は、彼らの都市についての概念からあまりにかけ離れた『都市』であった。[中略]つまり江戸は、彼らの基準からすればあまりに自然に浸透されていて、都市であると同時に田園であるような不思議な存在だった」と記す⁴⁸⁾。「緑の丘陵と谷間の水流、庭園、寺社、森、野原」があふれる江戸は実に美しい田園都市であった⁴⁹⁾。

現代人の目から見れば、田園風景の他に、「ふるさと」たる場所の必要条件として、温かい共同体における人間関係がある。江戸後期になると、特に下町にはこのような共同体が形成されており、「江戸っ子」としての特徴も明確化していった。要するに、当時の江戸っ子には、その生まれ育った場所に「血」と「地」のつながりがある時代であった。そういった血縁や地縁が稀薄になった現代では、東京に生まれた人は東京を「ふるさと」と呼ぶのを躊躇するのは無理もないことだろう。しかし、近世においては、古代や現代の「都会・田舎」という対立的な二元構造に基づいた「ふるさと意識」と異なる考え方が見える。つまり、中央と周縁はより平坦な関係であった。この新たな関係は近代の急速な人口移動によって弱まるが、近世における「ふるさと意識」を特徴付ける要素の一つであると考えられる。

むすび

以上、近世における日本人の「ふるさと意識」の形成と変容を考察してきた。古代では、

「本土」や「産国」という意味よりも、遷都の習慣によって「旧都」としての意味がより強かった。都中心の文化であったため、「都」とそれ以外の地である「周縁」が二元構造を成しており、「ふるさと」はそれらの中間的媒体のようなものであった。遷都の必要がなくなって貴族の力が弱まってくると、この「旧都」の意味から、最も現代的な意味での「出身地」としての「ふるさと」に切り替わっていった。近世の訪れとともに、日本人の「ふるさと意識」は徐々に具体性を帯びたローカルなものへと変容していく。「周縁」の特徴は広く意識され、移動がより自由になり、異郷の人と接する機会も増える。特に、幕藩体制の一環であった参勤交代制度と旅文化の発達がこれらの機会を増やしたと考えられる。その結果、一般の人々の間でも「ふるさと意識」と異郷意識がともに高まった。

近代の国民国家の成立とともに、日本人の「ふるさと意識」もまた変容していき、個性を失った田園風景、あるいは日本国土のシンボルへと形骸化されていった。さらに、「ふるさと」は国民的アイデンティティーを支える、「真」の伝統文化を継承した場所としても見なされるようになった。このような「ふるさと」の記号化の一方で、日本人の「ふるさと」への執着は一度もやまなかった。しかし、国際化が加速する現代社会において、ローカリズムを代表する「ふるさと」は不要となるのではないだろうか。おそらく、大震災後に新たな感心を寄せられたエッセーニンの言葉が答えになっていくのかもしれない。「天国はいらない、ふるさとが欲しい」。つまり、人間は具体性のない「天国」では真に満たされない。完璧な幸せは約束できないかもしれないが、風土に生きることの喜びと充実感を与えてくれるのは「ふるさと」のみである。「ふるさと」の大切さを忘れがちな現代人が昔の日本人の「ふるさと意識」を振り返れば、それがはっきり見えてくるのである。

註

- 1) 例えば、松本健一の講演集『天国はいらない、ふるさとがほしい』（人間と歴史社、2011年）や、震災後再び脚光を浴びたチェルノブイリ原発事故を題材にしたドキュメンタリー『ナージャの村』（平凡社、1997年）などがある。
- 2) 高野辰之は1876年（明治8年）に長野県下水内郡豊田村（現：中野市）に生まれた。長野県尋常師範学校を卒業後、文部省に雇われ、「故郷」の他に「朧月夜」や「春がきた」など、数々の唱歌の作詞を務めた。「故郷」の歌詞内容は高野のふるさとである長野県の風景に基づいているものだという説もある。
- 3) 中村幸彦校注『上田秋成集』（日本古典文学大系 第56巻）、岩波書店、1959年、注釈150頁。
- 4) 永藤靖「古代日本文学に現れた旅について——故郷と都の文学」明治大学文芸研究会『文芸研究』第25号、1971年、54頁。
- 5) 仁藤敦史『都はなぜ移るのか——遷都の古代史』吉川弘文館、2011年、13頁。
- 6) 永藤「古代日本文学に現れた旅について」71頁。
- 7) 園田英弘『「みやこ」という宇宙——都会・郊外・田舎』NHKブックス、1994年、115頁。
- 8) 同上。
- 9) 同上、116頁。

- 10) 永藤「古代日本文学に現れた旅について」69 頁。
- 11) Traganou, Jilly. *The Tokaido Road: Traveling and Representation in Edo and Meiji Japan*, (New York: Routledge Curzon, 2004), 14.
- 12) コンスタンチン・ヴァポリス（小島康敬、M・ウィリアム・スティール監訳）『日本人と参勤交代』柏書房、2010 年、3 頁。
- 13) 浅野健二校注『人国記・新人国記』岩波文庫、1987 年、49 頁。
- 14) 同上。
- 15) ヴァポリス『日本人と参勤交代』4 頁。
- 16) 同上、5 頁。
- 17) 同上、64 頁。
- 18) 同上、347-8 頁。
- 19) 同上、41 頁。
- 20) 同上、316 頁。
- 21) 池澤一郎「故郷としての江戸——南畝と江戸」『国文学：解釈と鑑賞』68 巻 12 号、(2003 年)、56 頁。
- 22) 同上。
- 23) ヴァポリス『日本人と参勤交代』316 頁。
- 24) 同上、299-300 頁。
- 25) 小林法子「大川市立清力美術館の江戸勤番之図」『福岡大学人文論叢』39 巻 4 号、2008 年、1265 頁。
- 26) 同上、1290 頁。
- 27) 同上、1267 頁。
- 28) ヴァポリス『日本人と参勤交代』298 頁。
- 29) 同上。
- 30) 同上、305 頁。
- 31) 荻生徂徠『政談——服部本』平凡社東洋文庫、2011 年、82 頁。
- 32) 深井甚三『江戸の旅人たち』吉川弘文館、1997 年、17 頁。
- 33) 池澤「故郷としての江戸」56 頁。
- 34) 永藤「古代日本文学に現れた旅について」53-9 頁。
- 35) 深井『江戸の旅人たち』164 頁。
- 36) 永藤「古代日本文学に現れた旅について」63 頁。
- 37) 池澤「故郷としての江戸」54 頁。
- 38) 浜田義一郎編『大田南畝全集』第 9 巻、岩波書店、1987 年、77 頁。
- 39) 浜田義一郎編『大田南畝全集』第 8 巻、岩波書店、1986 年、322 頁。
- 40) 同上、163 頁。
- 41) 同上、169 頁。
- 42) 同上、209-10 頁。
- 43) 池澤「故郷としての江戸」58 頁。
- 44) 同上。
- 45) 同上、59 頁。

- 46) 同上。
- 47) 同上、54 頁。
- 48) 渡辺京二『逝きし世の面影』葦書房、2005 年、367 頁。
- 49) 同上、368 頁。